

# 「風雲・関ヶ原」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成 23 年 7 月）から大幅に加筆修正して、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

## 1. 避けられなかった「豊臣家の落日」

16 世紀最後の 1600 年に我が国で起きた「関ヶ原の戦い」は、歴史に名高い戦(いくさ)として以前よりその名が知られており、これまでに小説や映画、あるいはテレビドラマで何度も紹介されています。

関ヶ原の戦いに勝利した東軍の徳川家康(とくがわいえやす)は、天下人としての道を着実に歩み、1603 年には朝廷から征夷大將軍に任じられて、江戸幕府を開きました。一方、敗れた西軍の石田三成(いしだみつなり)は処刑され、彼が懸命に支えようとした豊臣家は没落の道を歩むことになり、1615 年の大坂夏の陣でついに滅ぼされてしまいました。

このように、徳川家の栄光と豊臣家の没落とが、関ヶ原の戦いではっきり位置付けられたことは間違いないといえるでしょう。またその一方で、関ヶ原の戦いに至るまでの大きな流れをつかもうとしたり、関ヶ原の戦いでもし西軍が勝っていればと想像したりすることは、歴史の研究心を高めるとともに、現代にもつながる大きな教訓を得ることにもなるはずです。

今回の講座では、関ヶ原の戦いを題材に、様々な人間模様や「歴史の if」について探っていきたいと思います。

関ヶ原の戦いが起きたそもそものきっかけは、豊臣秀吉(とよとみひでよし)の死を原因とする豊臣家の急速な没落と、それを見越した家康による専横な行動でした。つまり、秀吉の死が、その後の豊臣家の運命を決定づけたといえるのかもしれませんが。

なぜ秀吉の死が豊臣家の没落の引き金になったのかといえば、後継者としてわずか 6 歳の豊臣秀頼(とよとみひでより)しか存在しなかったからでした。いくら何でも、6 歳の男児に政治が行えるはずがありません。秀吉の死によって生じてしまった政治的な空白を、家康に付け込まれたがゆえに、関ヶ原の戦いが起きてしまったといっても過言ではないのです。

秀吉と正妻のおねとの間には、ついに子が生まれませんでした。秀頼が生まれたのは、秀吉が 50 歳を過ぎた晩年になってからであり、側室の淀殿(よどどの)が産んでいます。天下人となった秀吉で

あれば、いくら正妻との間に子が生まれなかったからといっても、若いうちから側室との間に子をもうけていてもおかしくはないはずでした。

しかし、それは秀吉には無理な話でした。なぜなら、秀吉は「天下人になるべくしてなった」わけではないからです。

天下人となる以前の秀吉は、織田信長(おだのぶなが)の家臣として長いあいだ仕えていました。家臣の才能を見抜き、優秀な者には破格の出世を約束した信長でしたが、逆に自分の足を引っ張るような家臣に対しては、容赦なく叩き潰(つぶ)すという残忍な一面も持っていました。

そんな信長に対して、秀吉は実に要領よく立ち振る舞いました。自分に子がいなかったとしても、家臣という身分では深刻な問題ではなかったですし、またそれを良い機会として、信長の四男であった秀勝(ひでかつ)を自分の養子としました。

信長にしてみれば、自分の子が優秀な家臣の跡継ぎになるのですから、嬉しくないはずがありません。こうして「信長の家臣」としての地位を確実なものにした秀吉は、そのまま出世街道を歩んで生涯を終えるはずでした。

しかし、信長が1582年に本能寺の変で明智光秀(あけちみつひで)に暗殺されてしまったことが、その後の秀吉の運命を大きく変えることになったのです。

信長の死後に山崎の戦いで光秀を破った秀吉は、その後の巧みな戦術などによって信長の後継者としての地位を固め、自らが天下人となることに成功しましたが、養子としてもらい受けた秀勝は1585年に病死しており、後継者不足という大きな難関が秀吉を悩ませることになりました。

考え抜いた末に、秀吉は姉の子である豊臣秀次(とよとみひでつぐ)を養子として、関白の地位を与えました。そのこと自体に大きな問題はなかったのですが、1593年に秀頼が生まれると、実子に跡を継がせたいと思うようになった秀吉は、次第に秀次を遠ざけるようになりました。

そして1595年、秀吉から謀反(むほん)の疑いをかけられた秀次は、高野山に入って出家しましたが、その後に切腹を命じられ、また秀次の女子供を含む一族郎党の39人が京都で処刑されました。

それまでの「人たらし」としての面影が全く感じられない、秀吉による冷酷な行動は、我が子可愛さからきたものであると同時に、独裁者となったことで、猜疑心(さいぎしん、相手の行為などを疑ったりねたんだりする気持ちのこと)が強くなったことが理由のひとつであるとされています。

確かに秀吉の行為は、同じく独裁者となった信長の晩年と共通するところが見受けられますが、いずれにせよ、秀次一族に対する虐殺が、実は豊臣家のその後の運命を決定づけてしまったのです。

そもそも、秀次に謀反の意図が仮にあったとしても、一度出家した者に対して切腹を要求するという行為は、当時としても考えられないことでしたし、また、一族郎党を公開のうえ処刑したことは、

いかに戦国時代の風習が残っていたとはいえ、あまりにも「やり過ぎ」でした。

加えて、秀次やその一族を処刑したことは、数少ない豊臣家の親族をさらに弱める結果となり、いかに実子の秀頼が存在するとはいえ、成人した親族が一人もいなくなったことが、豊臣家の将来に暗い影を落とすことになりました。

また、いわゆる「秀次事件」に巻き込まれたことで、多くの大名が秀吉の不興を買いましたが、その大名の多くが、関ヶ原の戦いで家康側に属しているのです。我が子可愛さが余った秀吉による残酷な行為が、結果としてその後の豊臣家にとって「逆らえない落日」をもたらしたことは、意外にも知られていません。

## 2. 「敗軍の将」石田三成の真実

さて、関ヶ原の戦いで豊臣家を支えるべく、西軍の実質的な総大将として活躍したのが、秀吉子飼いの家臣である石田三成でした。

三成は物事に対して常に正確さを求め、また不正義な行動を許さない性格を持っていました。彼のこうした一面によって、秀吉による太閤検地を完全に実行することができたという大きな効果をもたらすなど、文治的な才能は非常に高いものがありました。

しかしその一方で、自分が完璧であると自負していたことで、それができないと判断した相手には横柄に振る舞うという欠点もありました。特に軍事面に強い武将とは相性が悪く、自分と同じ秀吉の家臣であった加藤清正(かとうきよまさ)や福島正則(ふくしまさのり)らと不仲となるとやがて対立し、彼らが関ヶ原の戦いで家康側に属する原因をつくってしまったのです。

とはいえ、関ヶ原の戦いで約80,000人ともいわれる軍勢を集め、その指揮をとったという事実は、三成が決して無能な武将でなかったことを証明していますし、また横柄な一方で、彼が親友に見せた「男気あふれる行動」が、現代においてもなお語り草となっています。

三成の親友に、同じ秀吉配下の太閤吉継(おおたによしつぐ)という武将がいました。吉継は若い頃からその非凡さを秀吉に称えられていましたが、ハンセン病と思われる業病(ごうびょう)を患っており、崩れた顔を白い布で覆(おお)っていました。

吉継の病状を知っていた他の武将は、吉継と接触することを嫌がり、茶会の際に吉継が飲んだ茶碗が回ってきてても、茶碗に口をつけるフリをして、茶も飲まずに次の人に回すことが何度もありました。

そんなある日の茶会のことです。吉継はいつものように茶を飲んだ際に、自分の体液を茶碗の中に落としてしまいました。信じがたい大失態に、さすがの吉継も慌(あわ)てましたが、同席していた三成が吉継から茶碗を受け取ると、何事もなかったかのように一気に茶を飲み干しました。

さらに三成は、「のどが渴いたので茶をもう一杯所望したい」と亭主に申し出ると、その際にわざと手をすべらせて茶碗を落としました。三成は慌てることなく、「転げた茶碗では皆様に対して恐れ多いので、取り替えてほしい」と告げて、茶碗を換えさせたことで諸大名を安心させるとともに、吉継に恥をかかせることを未然に防いだのでした。

三成の友情に感激した吉継は、その後の関ヶ原の戦いの際に三成と行動を共にする決意をしたのです。

さて、関ヶ原の戦いに敗れた三成は、家康によって処刑されましたが、彼は最期まで決して取り乱すことはありませんでした。

戦いの後に処刑されたのは、三成の他に小西行長(こにしゆきなが)と安国寺恵瓊(あんこくじえいけい)がいました。家康が処刑前の三人に対して小袖(こそで)を与えた際に、他の二人が何も言わずに受け取った一方で、三成は「この小袖は誰からのものか」と聞きました。使いの者が「江戸の上様(=家康)からだ」と返答すると、三成は「上様といえば秀頼公より他にいないはずだ。いつから家康が上様になったのか」と言って受け取らなかったそうです。

また、三成が刑場に引き出される途中で、のどが渴いて水を所望すると、警護の人間から「水は無いが、柿があるからそれを食べ」と言われましたが、三成は「柿は体に悪いからいらぬ」と答えました。警護の人間が「もうすぐ首を斬られる者が、体の具合を気にして何になる」と笑うと、三成は「大きな志(こころざし)を持つ者は、最期の時まで命を惜しむものだ」と平然と答えたと言えられています。

こうして、武運拙(つたな)く刑場の露と消えた三成でしたが、関ヶ原の戦いに勝利した家康側にしても、決して楽勝とは言えなかったのが真実でした。なぜなら、家康の別働隊ともいべき軍勢が、戦いに間に合わなかったからです。

### 3. 実は「薄氷の勝利」だった徳川家康

関ヶ原の戦いにおける兵力は、家康率いる東軍が約 85,000 人、三成率いる西軍が約 80,000 人と伝えられていますが、これは家康にとって大誤算でした。というのも、本来であれば 120,000 人を超える兵力を準備していたのが、別働隊の約 38,000 人の兵力が戦いに遅参していたからです。

なぜ別働隊は戦いに間に合わなかったのでしょうか。その原因は真田昌幸(さなだまさゆき)・真田信繁(さなだのぶしげ、別名を幸村=ゆきむら)父子にありました。

関ヶ原の戦いに向かうために東海道を進んだ家康本隊でしたが、それとは別に、子の徳川秀忠(とくがわひでただ)に軍勢を預けて、中山道(なかせんどう)を進ませました。つまり、家康は二つの街道から同時に関ヶ原方面を目指す予定だったのです。

しかし、中山道の途中には真田家が守る上田城がありました。関ヶ原の戦いという大きな目標があ

った以上は、上田城を無視して先に進むという手もあったのですが、昌幸・信繁父子の挑発に引っかけた秀忠は、上田城攻略を強く主張して容易に落とせず、結局多くの軍勢と時間を浪費してしまいました。

関ヶ原の戦いには勝利したものの、家康の怒りは凄まじく、秀忠が遅参に対してお詫びを申し出ても、しばらく面会を許さなかったと伝えられています。あてにしていた約 38,000 の兵力が使えなかったのですから、家康の怒りも当然といえば当然だったでしょう。

では、そんな不利な状況を家康が打開できたのはなぜでしょうか。カギを握ったのは、秀吉との縁が深かった一人の武将による「裏切り」でした。

西軍に所属した重要な武将の一人に小早川秀秋(こばやかわひであき)がおり、関ヶ原の戦いの際には約 15,000 人の軍勢を率いて松尾山に布陣しました。

秀秋は毛利家の名将であった小早川隆景(こばやかわたかかげ)の後継でしたが、実は秀吉の正室であったおねの血縁者であり、小早川家には養子として迎えられていました。秀吉と縁浅からぬ者として、その将来を期待された秀秋でしたが、朝鮮出兵における慶長の役に敗れて、領地を半減されてしまいました。

その後、秀秋が没収された領地に三成が代官として入ったことで、秀秋は「自分の領地が削られたのは、三成が秀吉に讒言(ざんげん、他人をおとしめるために事実でないことを告げ口すること)したからではないか」と疑いを持つようになったとされています。後に秀吉の遺言によって、秀秋は旧領を回復できたものの、三成への恨みはそのまま残っていました。

秀秋と三成とのこうした関係(というよりも秀秋による三成への一方的な決めつけ)によって、秀秋は最終的に家康の誘いに応じて、東軍に寝返ることを決断するのですが、そんな彼の行為によって、関ヶ原の明暗がはっきりと分かれる結果をもたらすことになりました。

秀秋が寝返るまでに、西軍に所属した武将の多くが動かずに日和見(ひよりみ)をしていたものの、両軍は一進一退の五分の戦いを続けていました。そんなところに、秀秋の約 15,000 人の軍勢が一気に松尾山を下って行ったのです。

秀秋の下に陣取っていた大谷吉継が、懸命に秀秋軍を食い止めていましたが、秀秋の様子を見ていた周囲の西軍の武将がこぞって東軍に寝返ったために、吉継軍は壊滅状態になり、刀折れ矢尽きた吉継は切腹しました。

この動きを見た家康が、東軍全軍に総攻撃をかけたことで、西軍の各武将は防戦一方となり、ついにはこらえきれずに敗走しました。こうして、天下分け目の関ヶ原の戦いは、一日で決着がついたのです。

なお、自身の寝返りが東軍の勝利に大いに貢献したとされた秀秋は、岡山 55 万石の大名に出世し

ましたが、1602年に21歳の若さで急死しました。秀秋には跡継ぎがいなかったため、家康によって小早川家は無嗣(むし)断絶を理由に改易、すなわち取り潰しの処分を受けています。

このように、秀忠が率いる約38,000人の軍勢が遅参するという大誤算はあったものの、小早川秀秋の裏切りによる影響の大きさもあって、家康は関ヶ原の戦いに勝利することが出来ました。

ということは、もし秀秋が寝返らなかったら、西軍と東軍はそのまま一進一退の膠着(こうちやく、ほとんど動きがなくなる)した状態が続いたでしょうし、また秀秋軍が家康軍を攻撃するために松尾山を下っていれば、壊滅状態になったのは、むしろ家康軍の方になったことも十分考えられるのです。

つまり、東軍が敗れて三成の西軍が勝利した可能性も有り得るのですが、もし西軍が勝っていれば、その後の我が国の歴史はどうなったのでしょうか。

この「歴史のif」を考えるにあたって、私は関ヶ原の戦いで「家康が生き延びた場合」と「家康が死んだ場合」の二つの条件でそれぞれ想像しなければならないと思います。まずは「家康が生き延びた場合」を考えてみましょう。

#### 4. もし関ヶ原の戦いで西軍が勝っていたら

もし関ヶ原の戦いで西軍が勝った場合、所属した武将は当然その所領を安堵(あんど)されるでしょうし、東軍に所属して討ち取られた武将の所領は没収されることでしょう。しかしながら、200万石を超える家康の所領に手を付けることは、家康が存在する限りはまず不可能といわなければなりません。

つまり、戦いに勝利したことで、豊臣家が優位に政治を進めようにも、家康が常に頭の痛い存在となりますし、三成などの優秀な官僚がいるものの、その支えとなるのが当時8歳の秀頼では、豊臣家が中心の政治の実現には無理があると思われま

かといって、関ヶ原の戦いで福島正則などの豊臣恩顧の武将を味方につけた家康が、第二・第三の関ヶ原の戦いを起こそうとしても、それらの武将が再び家康側につくとは考えにくく、豊臣家を一気に滅亡させることは不可能に近いといえるでしょう。何しろ、史実においても、関ヶ原の戦いから豊臣家の滅亡まで15年もかかっているのですから。

ということは、家康が生き残っていた場合は、我が国が東西に分かれて政治を行うと同時に、お互いの覇権を握るため、果てしない戦いを続ける可能性が十分に考えられるのです。そうなれば、戦国時代がこの後も続くことになり、史実における江戸時代のような長い平和の実現は、かなり遅れたことでしょう。

では、もし家康が関ヶ原の戦いで死んでいれば、豊臣家による平和な時代が達成できたでしょうか。

秀忠という後継者は存在したものの、家康というカリスマ性を持つ武将が死んだことによる徳川家

のダメージは計り知れないものがあると思います。そうなれば、多少の時間がかかったとしても、豊臣家によって徳川家が滅ぼされることも決して不可能ではないでしょう。

しかしながら、豊臣家にとっての大きな課題は、むしろ徳川家を滅ぼした後にあるのです。幼い秀頼率いる豊臣家が、果たして家康のような「平和の実現のために計算され尽くした政治」を実現できるでしょうか。

現実の世界において、家康は平和のためにあらゆる手を打っています。例えば大名の統治において、家康は政治に参加して権力を与えられた者には財力を与えず、逆に政治に参加できずに権力を与えられなかった者に対しては、その代わりとして財力として広大な領地を与えました。

これは、室町幕府の守護大名が、財力と権力とを同時に持っていたがゆえに幕府の言うことを聞かなくなったことによる失敗の教訓を生かした、「大名の権力と財力との分散」でした。この手法によって、家康は大名の統治に成功しているのです。

この手法が可能になったのも、家康というカリスマ性を持つ武将がいたからこそだったのですが、同じようなことを豊臣家が実行しようとしても、秀頼の言うことに対して、果たしてどれだけの武将が耳を傾けるでしょうか。

秀頼が大名の統治に失敗すれば、いずれは豊臣家による命令を聞かなくなる武将が増えていくことでしょう。その先に見えてくるのは、大名同士の私闘がもたらす戦乱の日々しかありません。

また、家康は朝廷や宗教勢力にも万全の対策をするとともに、徳川家の将来に対しても、御三家という「血のセーフティーネット」などの様々な政策を実行していました。このような「後顧(こうこ)の憂い」をなくしてこそ、安心して政治を実行できるものなのです。

しかし、大名統制ですら覚束(おぼつか)ない豊臣家に、徳川家と同じような政策が実行できるとは考えられません。ということは、一時的な平和の日々があったとしても、その先にあるのは、かつての戦国時代のように戦いに明け暮れる日々だといえるでしょう。

しかも、家康亡き後にカリスマ性を持つ武将は当分見当たらないとすれば、戦乱の日々がさらに果てしなく続くことにもなりかねませんし、そんな混乱を見越した外国に付け込まれることによって、我が国が滅亡の危機に瀕(ひん)することも有り得ます。

「そんな馬鹿な」と思われるかもしれませんが、現実の世界において、秀吉や家康がキリスト教(=カトリック)対策としてどのような政治を行ってきたかを振り返ることで、決して大袈裟(おおげさ)でない「もう一つの真理」が見えてくるのです。

我が国で戦国の世が続いていた頃、海外ではヨーロッパの白色人種によって、「大航海時代」という名の、他の有色人種への情け容赦ない侵略が行われていました。

彼らは、海外での布教に存続を賭けていたカトリックが組織したイエズス会と連携(れんけい)して、先住民にカトリックを布教させてから、「神の名の下に」戦争を仕掛けることで、アフリカ大陸やアメリカ大陸を次々と支配し続け、その魔の手がついにアジアにまで伸び始めていたのです。

イエズス会の宣教師であるフランシスコ＝ザビエルによって、1549年に我が国でカトリックの布教が広がり始めた頃、当時の戦国大名は、ヨーロッパによる白人支配の野望に気づくこともなく、南蛮(なんばん)貿易でヨーロッパ渡来の珍しい財宝を手に入れるため、支配地でのカトリックの布教を許可するとともに、自らも「キリシタン大名」としてカトリックを信仰する者も現れました。

天下統一を目指した織田信長も、同じ理由で支配地におけるカトリックの布教を許可し、信長の後継いだ秀吉も、当初はカトリックの布教を認めていたのですが、やがてカトリックに潜むヨーロッパによる世界侵略の野望に気づいたことで、禁教へと政策を転換しました。

その後、ヨーロッパが中国の明(みん)を侵略して、返す刀で我が国に攻め込む野望を持っていたことに気付いた秀吉は、先手を打つかたちで明への「唐入(からいり)」を決意し、その前提として朝鮮に出兵しました。

そして、秀吉に代わって天下人となった家康も、彼が創設した江戸幕府によってカトリックの禁止を強化し、海外との大幅な制限貿易を実現したことで、カトリックを我が国から締め出すとともに、ヨーロッパによる侵略を完全に防ぐことに成功しました。ちなみにこの状態が、後年に「鎖国(さこく)」と呼ばれるようになります。

このようにして、史実におけるヨーロッパによる我が国侵略の野望は、秀吉からバトンを受け継いだ家康によって打ち砕(くだ)かれたのですが、このことを可能にしたのは、家康がそのカリスマ性を十分に活かした、強固な基盤を持つ江戸幕府を組織したからでした。

ということは、もし西軍が家康を滅ぼしたことで、カリスマ武将がいない混乱した状態に我が国が陥(おちい)っていれば、その隙(すき)をついた諸外国によって、我が国が乗っ取られるかもしれないという話は、決して荒唐無稽(こうとうむけい、根拠がなくでたらめなこと)ではないと言えるのです。

関ヶ原の戦いで家康が勝ったことは、私のような家康嫌いの人間にとって決して許せないことではありますが、その結果として我が国に平和が訪れるとともに、諸外国からの侵略を免れることが出来たというのもまた事実なのです。

## 5. 関ヶ原の戦いから見えてくるもの

いつの時代もそうですが、上の政治組織がしっかりして、国内が団結もしくは安定している場合は、外国等の対外勢力が付け入る余地がありません。例えば強固な江戸幕府が存在していることで、忠誠を誓う大名は幕府を支えようと懸命に働きますし、内心反発している大名も、親幕府派に周りを囲まれていては何の手出しもできません。



しかし、これが政情不安定となると一変します。誰もが天下人になれるかもしれないと思えば、どんな手を使ってでも他の大名よりも先んじようとするのが普通ですし、また周囲に攻め立てられて追いつめられた大名は、どんな手を使ってでも助かろうとしますでしょう。

我が国の史実における幕末の場合も同じようなものでした。薩長ら討幕派はイギリスの、幕府はフランスの支援をそれぞれ受け、武器や弾薬の提供を受けています。しかし、両者は「それ以上の支援」を結果として断りました。

「それ以上の支援」とは何でしょうか。武器や弾薬は買えば入手できますが、量が増えれば当然相手は何らかの「担保」を要求するでしょうし、また兵力が不足していれば、当然のように外国の兵力を借りようとするか、あるいは外国の方から提供を申し出るでしょう。

実は、これこそが「滅亡への入り口」なのです。

外国が要求する「担保」といえば、相手国、すなわち我が国の領土の一部という場合がほとんどですし、また外国の兵力を借りて戦った場合には、勝っても負けても「血を流した」代償を要求されるでしょう。その結果、我が国は外国からの侵略の糸口を自ら提供してしまうことになるのです。

関ヶ原で西軍が勝って家康が死んだ場合も、いずれは室町時代の応仁(おうにん)の乱のような、大混乱の世の中が待っていると考えられます。そうなれば、応仁の乱の頃とは違って、外国の勢力の存在をいずれの大名も知っているのですから、切羽詰(せっぱつ)まった大名の中には、後先(あとさき)のことを考えず、外国から領土の割譲を条件に、武器や弾薬、あるいは兵力を借りる者も必ず現れるでしょう。一度そうなってしまえば、後に待っているのは我が国滅亡の危機なのです。

過去の歴史をひも解いても、外国の侵略を受けて滅亡する国は、決まって国内が混乱状態にあります。家康の思惑はともかくとして、江戸幕府が結果として長年の平和をもたらしたことは、我が国にとって想像以上の貢献をしているのかもしれない。

もっとも、その幕府が外交上やむを得ず行った制限貿易を鎖国と見なし、時が流れて世界情勢が大きく変わってもその仕組みを変えようともせず、結果として幕末の混乱をもたらしたことは、何とも言えない皮肉ではありますが。

ここまで述べてきたように、関ヶ原の戦いにおける、様々な側面や「if」を学ぶことによって、私たちは現代にもつながる大きな歴史の流れをつかんだり、あるいは自分の知識や人生の幅を広げたりすることも可能となるのです。

過去の歴史の事実について検証を重ねることが、我が国の未来における有効な判断にもつながるものであると信じて、今後もこういった研究を大いに続けたいと思っております。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 11 戦国乱世編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379681>

「逆説の日本史 12 近世暁光編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>

YouTube 再生リスト「風雲・関ヶ原」  
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5TJ7ilMuVVB4cBMjQuZ8VE>

黒田裕樹の歴史講座  
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>